「罪赦されて歩む」（ルカによる福音書七・三六～五〇）

1　ファリサイ派シモンと罪の女

「ナルドのつぼならねど」（旧三九一番、現行五六七番）、私など旧讃美歌の歌詞のほうがいまも口をついて出てしまうのですが、一人の女性がイエスに香油を塗ったという出来事、四つの福音書全部に伝えられ、讃美歌としても歌われているよく知られた逸話です。

ただ、福音書全部に出ているといっても、比べて見ると、いま言った、一人の女性がイエスに香油を塗ったということ以外は、かなり違っております。

それを一つ一つ挙げることはしませんし、いま必要もないことです。ルカによる福音書が他と違っているのは、ほかの三つの福音書がすべて、この出来事の時期をイエスの受難、イエスの十字架の直前としているのに対して、ルカはむしろイエスの活動の初期、ガリラヤ伝道で起こったとしている点です。ただし、それがどこでの出来事かは、分かりません。七章でイエスはカファルナウムの町に戻り、さらにナインという町に行っています。そこで一人のやもめの息子を生き返られることをしています。その後の場所の移動は明示されていないので、ナイン、ないしその近辺でのことと考えておきたいと思います。

こうしたことはむろん何回もあったことではないでしょう。かといって他の福音書に書いてあることをルカが、彼なりに書き直したとも（違いが大きいので）思えません。やはりガリラヤ伝道の中で起こった出来事です。

ここに伝えられていることにとくに込み入ったところはありません。イエスがあるファリサイ派の人（名前はシモンです）の招待を受けて、その家に行って、食事の席についていたときのことです。ギリシャ・ローマ式に寝そべっていたとも考えられますが、私には正確には分かりません。

一人の女が（罪深い女とあります）入ってきて（家は外から自由に入れるようになっていたようです）、泣きながら後ろからイエスに近づき、イエスの足を涙でぬらし、それを自分の髪の毛でぬぐい、さらにその足に接吻して、香油を塗った、そういうことが起こったのです。

ただここまでのところでも、分からないことがたくさんあります。意味のある問いかどうか分かりませんが、挙げると、たとえば、このファリサイ派の人シモンはどんなつもりでイエスを食事に招いたのであろう、この「罪深い女」は、なぜ罪深いと言われているのだろう、彼女はイエスを、前から知っていたのであろうか、そのように見えますけれど、それならそのときイエスのところにやってきた意味、その願い、何のために来たのか、などです。そしてそもそも、この逸話の中心人物はファリサイ派のシモンなのか、それとも罪の女なのか、これもはっきりしません。そうしたことも少し頭において、見てみたいと思います。

いま最後に申し上げた主役はだれかという問題、むろんイエスは別にして、シモンなのかそれとも罪の女なのか、私はあえて、それは両方だ、二人だと言っておきます。

イエスの思いの中には、それぞれ違った意味で、彼らの人生のことがあった、その救いのことがあったと思われるからです。

なぜそういうかと言えば、先週取り上げた前の箇所との関連です。前の箇所に、ファリサイ派の人々や律法学者たちが洗礼者ヨハネの悔い改めの洗礼を受けず、神の御心を拒んだとありました（三〇節）。当然のことながら、彼らは、イエスも拒否します。そしてイエスに対して、大食漢で大酒飲み、徴税人や罪人の仲間だと悪口を言い非難していたのです。

そのファリサイ派、そこに属する人々、みんながみんなイエスを拒否したのでしょうか。今日の箇所を見ると、そうでもないようです。ここに出てくるシモン、彼はイエスを「先生」と呼び、「おっしゃってください」（四〇節）と言って、聞く用意のあることを示しています。しかしファリサイ派であることは変わりません。イエスはシモンを心にかけ、彼を教え諭そうとしている、そのように見えます。彼も主役である理由です。

他方イエスは、前の箇所で、「徴税人や罪人の仲間」と世の人からは見られていました。その意味で、やはり罪の女が、イエスとの関わりにおける主役です。今日の箇所では、イエスはそういう連中の仲間だと言われることで終わらず、イエスとはだれだろう（四九節）という問いが生まれています。その意味でもここで起こったことはガリラヤ伝道のクライマックスなのです。

2　シモンへの呼びかけ

ファリサイ派のシモン、そして罪の女、この二人ともが今日の箇所の主役だ、イエスは二人を気にかけておられる、と申しました。最初にイエスの前に立たせられたのはシモンです。

シモンは、自分の招いたイエスが、食卓で、罪深い女のするままになっている、女が寝そべっているイエスの足もとに泣きながら近づき、ついには接吻し香油を塗っている、それもそのままにさせていることに疑問をいだきます。イエスが真の預言者であるなら、その女が罪の女であることが分かるはずだし、むしろ清い人を汚れた人から区別し、清い者を神のために集める、それが預言者というものだ、シモンはそのように心の中で考えたのです。

このシモンの心をイエスは見抜いて（イエスは預言者――ルカ二四・一九）。一つの譬えをもってシモンに語りかけます。

イエスはお話しになった。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか」。シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。イエスは、「そのとおりだ」と言われた。そして、女を方を振り向いて、シモンに言われた。「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの

足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが入ってきてから、わたしの足に接吻してやまなかった。あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない」（四一～四七節）。

罪の女がイエスにしたこと、食事会のホストであるシモンはもちろんよく見ていました。しかしその意味を彼はつかみ損ねています。疑わしい目で見ていた。罪深い女が訳の分からぬことをしていると。

女は言葉を発していません。ひと言も発していません。突然後ろからイエスの足もとに近づき、泣きながら涙でぬらした足を髪の毛で拭う、イエスの足に接吻し、香油を塗る、なかなか理解できない行為です。

この女はどういう女、どういう意味で罪人であったのでしょうか。多くの人は遊女だった、娼婦だったと見ています。彼女は、自分はだれよりも罪深い、神の民に相応しくないと考えています。しかしイエスが「徴税人の仲間」「罪人の仲間」であることはよく知っていました。イエスが近くに来たこと、シモンの家に行ったことを「知って」（三七節）、入り込み、イエスにすがったのです。自分の負ってきた人生の苦しみをみなイエスの前に注ぎ出します。

イエスは彼女を受けとめます。なすがままに、とがめ立てをすることなしに、受けとめます。それはシモンには理解できなかったことです。イエスはシモンにこう説きます。自分の借金をだれよりも多く帳消しにしてもらったことを知ったら、だれよりも多く恩義を感じるのではないか、それと同じだと。

使徒パウロが、その手紙で、私は罪人の頭だ（Ｉテモテ一・一五、口語）と書いているのは有名です。自分の罪がイエス・キリストの十字架によって許されたことを知ってはじめて彼は、その許された自分の罪の大きさを思わないわけにはいかなかったのです。罪の女の行為は、イエスにとって、彼女が多くの罪を赦されたことのまさに証拠でありました。罪が許されているから彼女はそうしているのだとイエスはシモンに説明したのです。

シモンがこれを聞いてどのように反応したか、そのことは書いてありません。イエスが、罪の女を、いわば実物教育として、シモンに呼びかけ、彼を説得しようとしていることは確かです。まず罪赦されて生きる、あなたもあの女のようにそこから生きるように、イエスは彼に呼びかけています。

3　愛は罪を覆う

イエスの問いの前に立たせられたシモンの応答は、今日の箇所には書いてありません。イエスは今度は女に語りかけます。

そして、イエスは、女に、「あなたの罪は赦された」と言われた。同席の人たち

は、「罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう」と考え始めた。イエスは女に、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた（四八～五〇節）。

女がイエスに対して、むろん彼女なりの、一生懸命の愛の行為をつづけているのは罪赦されているからです。すでにシモンには明らかにされた真実が、女に改めて語られなければなりません。そこでイエスは、「あなたの罪は赦された」と宣せられたのです。

罪の女に、かくて新しい人生が開かれます。そしてそれを開いたのは、じつに彼女自身の「信仰」であったことをイエスは明らかにしています。「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」。「イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り」（三七節）という言葉を改めて思い起こします。罪の女がイエスのところを聞きつけてやって来た、何の外聞も気にせず、すべてを神の子イエスの前に注ぎだした。それだけでした。しかしそのことをイエスは信仰だと見たのです。それゆえ彼女を救ったのは彼女の信仰だったと。

ところで女に向けて宣せられた「あなたの罪は赦された」という言葉は、たんにこの女のためだけ語られたものではありませんでした。「同席」していた人たちも耳にしたのです。招待されシモンの食卓に連なっていた人たち（多くはファリサイ派だったでしょう）、彼らが、罪を赦すイエスに、関心を持ちはじめたことが書いてあります。というのも、イスラエルで、罪を赦す権威をもった方は神お一人だと、彼らは考えていたからです。彼らは、これをきっかけに、この罪の女を、受け入れるようになると、期待したいのですが、どうでしょうか？　神の民として人々と共に生きる、それが彼女の新しい人生でなければならないのです。

今日の聖書は、私どもに、いくつかの聖句を思い起こさせるものです。昔から引照される一つは、ペトロの手紙一、四章八節です。

何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆（おお）うからです（ペトロ一、四・八）。

愛は多くの罪を覆う。「多くの罪」とは、他人（ひと）の罪だけではなく、まさに自分の罪でもあります。

これはもともと旧約聖書の「箴言」から来ています。「憎しみはいさかいを引き起こす。愛はすべての罪を覆う」（一〇・一二）。覆う、覆い隠す、カバーする、ということです。

今日の箇所、この罪深い女、彼女の愛の行為は、彼女の罪を覆い隠したのです。「この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである」（口語訳）。神の愛に従って愛に生きるとき私どもの罪は覆われます。イエスの教えに従い、互いに心を込めて愛し合う、それによって他人（ひと）の罪も、そして自分の罪も覆い隠されるのです。そのように聖書は私どもに教えています。

（二〇二一・七・一八）